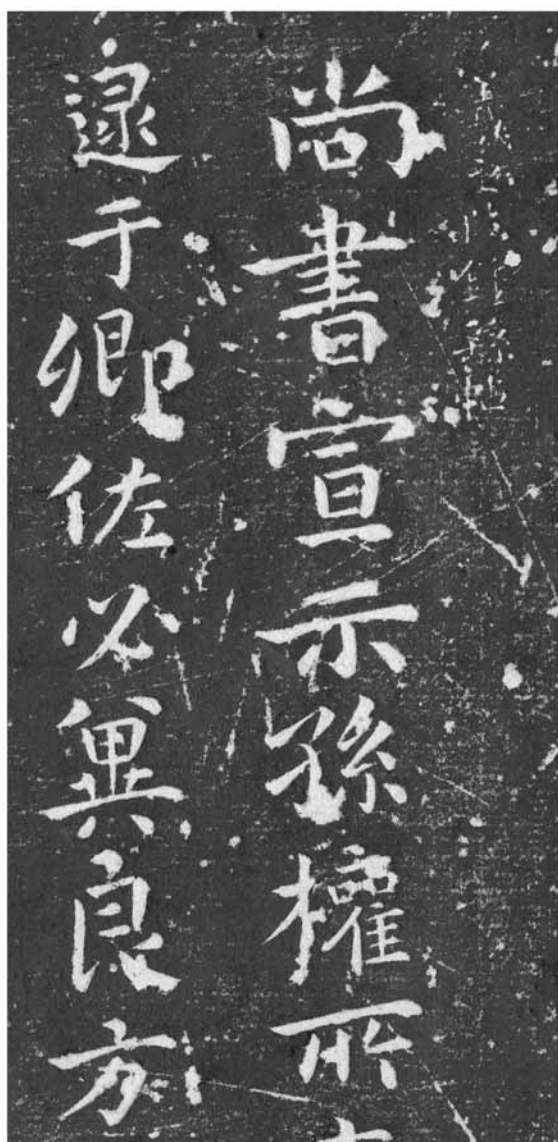




「落ち穂拾い記」⑥
伝・賈似道刻
『宣示表』下

1985年に自費出版として前回紹介した『宣示表』を中心に木鶏室金石拾遺第2輯を制作したときは、王羲之の研究で有名な北京の王玉池先生の「鍾繇の書法芸術」(1982年『美術史論』所載)の論考を翻訳して主な解説とした。その頃に刊行されたばかりの『善本碑帖録』(張彦生著)には、『宣示表帖』として各種の法帖に収録されるものを数種あげ、この賈似道刻本にも触れ、最後に「・民国の初め、この原石は上海にあり、解放後も上海にあり、上海博物館に蔵されているかも」と記されていた。それで第2輯の解説の末に、この『善本碑帖録』の文を引用して付した。しかし、上海博物館には所蔵されておらず、民間の個人宅で密かに宝蔵されていたようである。20数年後の2009年末の「翰海15周年記念オークション」の図録を見せられ驚嘆した。あの伝・賈似道刻『宣示表』の原石が、特別出品されていた。また、この宣示表の原石を説明する単冊の図録が制作されていた。この図録を参考に非常に珍しい原石を簡単に紹介しよう。図①が、宣示表の全体である。銘木を用いて制作された台の上に原石を覆うように保護する筐が被せられ、晋

図①宣示表原石の保存筐にいれ、専用台に置かれた状態



図②原石の表面と側面



図③表面と裏面の整拓本



図④原石裏面の張廷済跋と金冬心跋



王羲之臨鍾繇宣示帖等の題字が刻されている。図②が上から覆われていた筐をはずした写真である。帖石の大きさは、縦27.4、横62.5、厚さ11.3cmである。表面に宣示表が刻され、左に少し余白がある。裏面には、金冬心、所蔵者であった張廷済の跋が刻されている(図③④)。またこの宣示表の置かれていた台座の板の下には、その他の金石家七名の跋を刻した石板が嵌め込まれている。家蔵本も、この原石の表面と裏面、更に台座の下に嵌め込まれた七家の跋文も拓されている。この原石は、清朝後期から清末を経て、現在までの度重なる混乱の時代を乗り越え、実に美事に保存され秘蔵されてきたことを物語っている。オークションでは、価格は明示されず、問い合わせる様に表記され、売り出しが公表された。しかし、政府の文物管理部門が重要文物と認識し、この売り出しは、中止された。最終的には、『玉版十三行』の原石と同じく、北京の首都博物館に納まった。当時の新聞には、「……翰海のオークション会場では、国家が優先的に購入することが告げられ、出品が取り下げられたと、……その後、首都博物館が、五千万円で購入」と報じている。宋の宰相・賈似道が刻したとされる天下の名品の最高の原石二件が、北京の首都博物館に所蔵されている。この出来事の翌年、北京の王靖憲先生を訪問した際に、この宣示表の原石を首都博物館が購入する時に呼ばれて原石を確認したことなどを話された。これまでに偶然なことであるが、この珍しい宣示表拓は、前号で示した他に、原石旧蔵者・張廷済手拓本、更に王献之の玉版十三行と宣示表の二種が合冊された帖を手にしてきた。右頁の主図版は、原石と拓本の拡大比較である。

書のひろば

理事長 下谷 洋子

第78回書道芸術院展

審査会員・同候補作品搬入

一般公募・無鑑査作品は、昨年12月に鑑別審査を終えましたが、本年1月17日に審査会員・同候補の書類搬入が行われました。作品は、同月27日表装された一般公募・無鑑査作品と一緒に東京都美術館に搬入されました。

候補以上の作品は、28・29日に特別賞選考委員(財団理事・監事)によって審査が行われました。

28日 審査会員候補選考(大賞・準大賞・白雪紅梅賞・俊英賞)

29日 審査会員選考(春華賞)併せて秋季展出品作家、79回展大作出品者の選考も行いました。

入賞者は別掲の通り。

・会 期 2月5日(水)～11日(火)

・会 場 東京都美術館

・表彰式 2月8日(土) 15:30

上野精養軒

・祝賀会 2月8日(土) 17:30

上野精養軒

・行事予定

2月9日(日)

大賞・準大賞受賞者席上揮毫

前衛書展研究会

ワークショップ

一般無鑑査各部作品研究会

2月11日(火)

作品研究会

(速報)

第78回展春華賞 かな 熊谷 翔

同 大 賞 かな 菅原澤花

同 準 大 賞

(漢字) 伊藤草鈴・藤野江雪

(かな) 中里智香

(現詩) 岡本要翠・甲谷鳳梨

同 白雪紅梅賞

(漢字) 猪原美風・岡本通子・田中

岳丹・中嶋佐緒里、(現詩) 阿部玲

雅・小幡華恵・下津丹楓・山崎琳佳

(前衛) 工藤史音・藤崎松月

同 俊英賞

(漢字) 阿部雅悠・石塚紀朋・大野

純奈・金延憲市・栗原華泉・坂井白

萩・高木竹寿・豊田翠玉・古川彩遥・

三浦小樹・本柳小篁・山口鈴風・山

下船崖・山田明雪・和久井芳燕、

(かな) 田中耶衣・苗代佳恵、(現詩)

熱海桃翠・池田哲子・石澤青仙・伊

藤玖苑・大里香溪・大友佳・小野幽

景・小野寺礼華・高橋真弓・西村松



選考委員の先生

苑・菱沼範子・圓尾聰春・三浦淡虹・

若林泰石、(篆刻刻字) 中奥杏花、

(前衛) 石田香・佐々木藍水・関谷

明美・野口元道・林美奈子・平塚汀

泉・廣田紫・伏津玲子・辺見芳紅・

本田美雪・宮崎久仙

同 春華賞、同候補(A赤シールで

表示 秋季展選抜作家)

(漢字) 青柳明華・朝倉希代子・伊

藤珠己・岩垣若翠・宇田川春華・大

内榮軒・大川代香・小川白柳・衣田

琴草・木村香翠・小竹正高・佐伯哲

哉・坂本大龍・谷田熾箋・中尾琴麗、

(かな) 小林純風・都丸みどり・羽

田招佳・松村くに子、(現詩) 臼井

真理・大友汐苑・大野清玉・小池蹊

舟・小竹明峰・齋田舞夢・坂本龍水・

穴戸雲水・鈴木承琳・鈴木博貫・武

山櫻子・永井鳳雪・山崎掃雪、(篆

刻刻字) 石川三峰、(前衛) 相内珠

莉・阿部昌里・荒谷明美・嵯峨翔葉・

坂田翠江・杉本敦子・須藤彰仁・高

原紗秀・竹内成美・三木彩月

※次回展「大作」出品者(3名)

(かな) 熊谷 翔、(現詩) 山内松吾

(前衛) 千葉紅雪

※選考委員注目作

(漢字) 小竹正高・佐伯哲哉・市川

将義、(現詩) 山内松吾、(前衛) 相

内珠莉・荒谷明美

第78回書道芸術院展搬入状況

部門	審査候補	前回展	審査会員	前回展
漢 字 部	210	211	171	172
か な 部	36	41	55	52
現代詩文書部	204	211	157	163
篆刻・刻字部	10	11	14	17
前 衛 書 部	130	129	118	116
合計	590	603	515	520
増減	△ 13		△ 5	

漢字書基礎基本講座 (9)

種谷萬城

神龍半印本の臨書

『流觴曲水』

流觴曲水

神龍半印本蘭亭序の倣書

『絶妙』

絶妙

『之』字 多様な字形

『之』字の多様な字形

行書の特徴

- ・『点画の連続』
- ・『点画の省略』
- ・『筆順の変化』

月林花
月林花

行書1 神龍半印本蘭亭序
行書は、漢代に隸書を草卒に書く中から生まれた。三国時代を経て東晋時代の王羲之に至り書したにも芸術的にも完成。その後、楷書を速書して生じた行書も加わり、表現は多様化し、中国、日本の書道史上に、流動美と表情豊かな魅力に溢れた多くの名品が残された。楷書と比べると『点画の連続』『点画の省略』『筆順の変化』等の特徴がある。

王羲之(307~365年頃)は、字を逸少。王右軍とも呼ばれる。唐・太宗皇帝が、その書に心酔し蒐集してから、『書聖』と尊ばれた。その書は、八分・隸書(現在の楷書)・行書・草書・飛白など各体を良くしたという。

永和九年の春、会稽山陰の蘭亭で催された流觴曲水の宴で、王羲之が皆の作った詩集に序文を作り、一氣にそれを書き上げた。これが蘭亭序。鼠鬚筆で蚕繭紙に書いた蘭亭序は、線の表情が豊かで、『之』字の例に見られるように、同じ字が二倍以上出ると全て形を変えている。変化自在な傑作で、後日書き直されたが、当日書いたものには及ばなかったと言われている。

王羲之の7代の孫・智永に伝わり、弟子弁才の手から、唐の太宗が入手。太宗は、歐陽詢、虞世南、褚遂良、馮承素など、当時の能書家に命じて臨模させた。原本は太宗が熱愛の余り昭陵に殉葬。現在は、張金界奴本、神龍半印本、定武本、褚遂良本など多数の臨模本が伝来し、今に至るまで行書の規範となっている。

神龍半印本は馮承素の模写と伝える。用筆、字形とも変化に富み、自然で洗練され、各種の臨模本の中でも最も筆脈が明白に伝えられている。臨書の際には、以下の点を考慮したい。

- 1、自然で変化のある形態。方円、長短、大小の組み合わせ。
- 2、気脈の貫通。
- 3、速度(遅速)、筆圧(強弱)等、変化ある運筆、用筆による線の太細と曲直の変化。

ユーチューブ『筆のサロン』に臨書と倣書の関連動画を配信しました。是非ご覧下さい。
QRコードでアクセスできます。



筆のサロン
QRコード

基礎基本講座

篆刻・刻字基礎基本講座 (9)

後藤大峰

今回は、印材について、話を進めて行きたいと思います。

一般的に、印材は100パーセント、中国産と言えます。

古くより、よく名前が出て来るのが、青田石(浙江省青田産)、寿山石(福建省寿山産)などですが、最近では、さらに多くの種類の印材が産出されています。

硬軟、様々あり、実際に販売店などに行かれ、自身に合った印材を見つけ出して見て下さい。

それには、当然のことですが、それぞれの印材の硬軟とともに、粘りとか、もろさとかを確認し自分に最適の印材を探し出すことが大切です。

筆者は承らく、青田石を使用しています。

最近では価格的に高騰しているもので、中々大変ですが、一番扱いやすい感じが致しております。

それから、少し柔らかさのある、女性用とも言える印材も最近販売されてきております。

お近くの販売店に行かれまして、お聞きになりご自身に合ったものを見つけてみて下さい。

まずは、一個でも多く印材に触れて、彫ってみましょう。他の文房四宝と同じで自分に合った最適の印材を見つけることが大切です。

あなたにあった印材を必ず見つけることができます。次回回は篆刻作品を創るに当たって必要な、様々な用具についてお話を進めて行きたいと思っております。



青田石



寿山石

書道芸術院

令和の群像 (2025)



阿潟浜 翠 燕

『散華』

第75回記念書道芸術院展に出品した『散華』は、特別な思いを込めて書いた作です。

コロナ禍の最中に、たった一人の弟が亡くなりました。遠く離れていましたので、駆けつけることもできずに、気持ちが塞ぎ込んでいました。芸術院展の締め切りは、容赦なく刻々と迫ってきます。気持ちが焦り、悶々としている時に、『散華』が自然と頭の中に浮かんできました。“ハッ”と心が動きました。ここからは、今までの

制作過程とはすべてが違いました。いつもは題材選び、文字の構成、墨色と悪戦苦闘しているのですが、この度は何の迷いもなく、字体・構成と決まり、最後は、作品の命とも言える墨作りです。

いつ使おうかと大事にしていた墨を、丁寧に、心を込めて磨りました。とても気持ち良く磨りあがりました。それをベースにいろいろ合わせていくと、今まで経験したことのない雰囲気、墨色がでました。滲みも思い描いていたものがでて、一気に気持ちが引き締まりました。

墨は、良くも悪くも刻々と変化します。まさに“生きもの”なのです。故に、これ

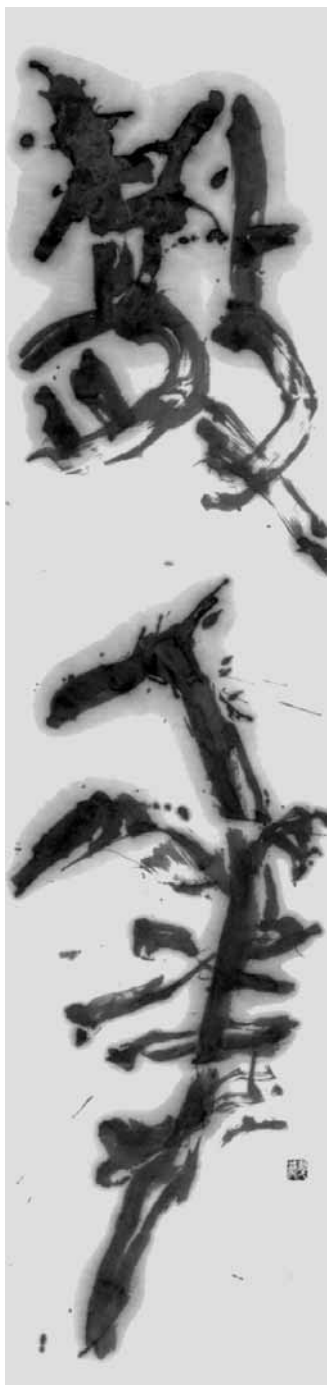
と思った瞬間、一気呵成に書きあげました。これだと思ふ実感が、五感で感じとれるものが、書けました。

この様な体験は今までになく、初めての感覚でした。これは弟が書かせてくれたものだと感じました。

常々、作品は書いたものではなく、生まれるものでないと駄目だと、指導を受けてきました。どういふことか頭で理解できても書けませんでした。“そんな難しいこと私にはできません”と、口走ったこともありました。

悲しい出来事の中でのことではありましたが、実体験を弟にさせてもらいました。その作品が、記念賞を受賞しました。

感動で胸がいっぱいになりました。書に感謝しています。



第75回記念書道芸術院展記念賞「散華」

阿潟浜 翠 燕 書

現代の書 新春展

今いきづく墨の華

セイコーハウス銀座ホール展 2025年1月4日(土)～9日(木)

セントラル会場 100人展 2025年1月4日(土)～9日(木)

主催・毎日新聞社・(一財)毎日書道会

千支文字



「あぢきなく」和泉式部『和泉式部日記』

下谷洋子



49×36cm

〈セイコーハウス銀座ホール展〉

こころみに雨も降ら
なむ宿すぎて空行く
月の影やとまると
あぢきなく雲居の月
にさそはれて影こそ
出づれ心やはゆく

いづみし(之)き(支)ぶう
た
こ(古)こ(ころ)路(み)二(に)
に(耳)雨(あ)免(も)降(婦)
らな(奈)む(无)宿(や)と
す(春)ぎ(支)て(氏)空(曾)
ら(行)遊(く)久(月)の影
(可)希(や)と(登)ま(万)る
と
あぢ(遅)き(木)な(那)く
(久)雲居(井)の月に(二)
さ(佐)そは(盤)れ(連)て
(氏)影こそ(所)出(い)づ
(徒)れ心やは(者)ゆ(遊)
く(九)

小竹石雲



「裸木」高野ムツオ

70×160cm

千支文字



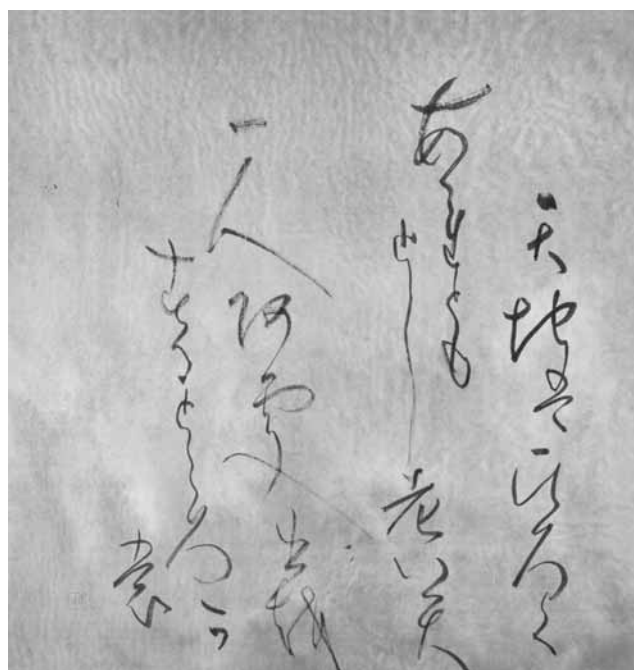
〈セントラル会場100人展〉

(50音順)

千支文字



「天地は」清水比庵



石井明子

100×95cm

石田
春窓



「桜」

90×121cm

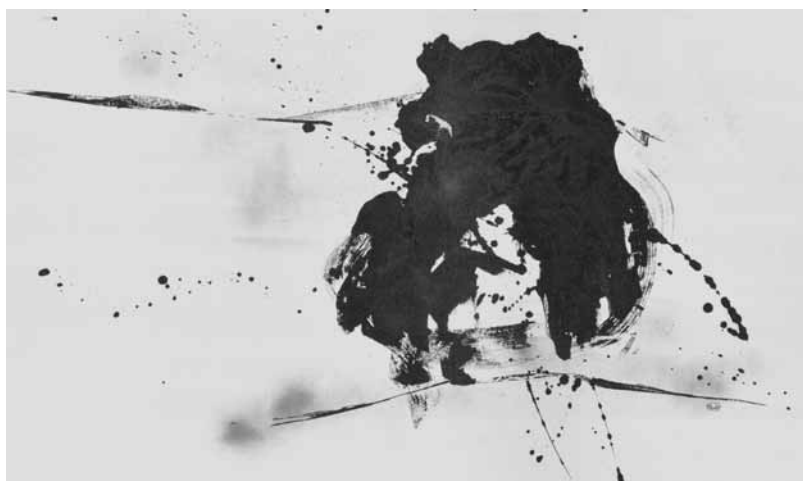
千支文字



千支文字



太田
蓮紅



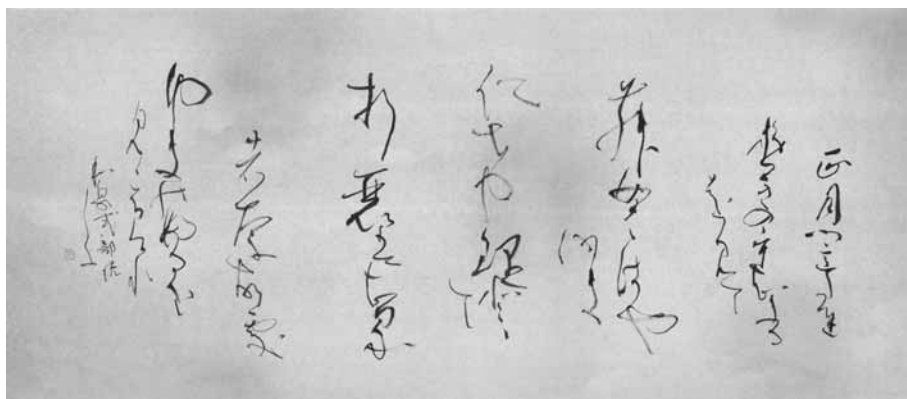
「時の瞬き」

58×96cm

千支文字



大辻
多希子



「正月朔」和泉式部『和泉式部統集』

61×139cm

千支文字



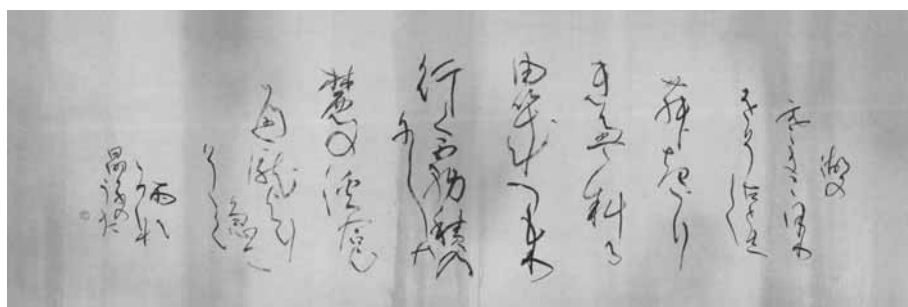
大平
邑峰



「思い」高村光太郎

60×181cm

勝山
初美



「湖の」与謝野晶子

61×183cm

千支文字



千支文字



坂本
素雪



「八甲田連峰の春」自作

111×82cm

武山
櫻子



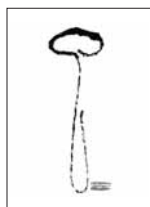
「川瀬佳穂の句」

71×152cm

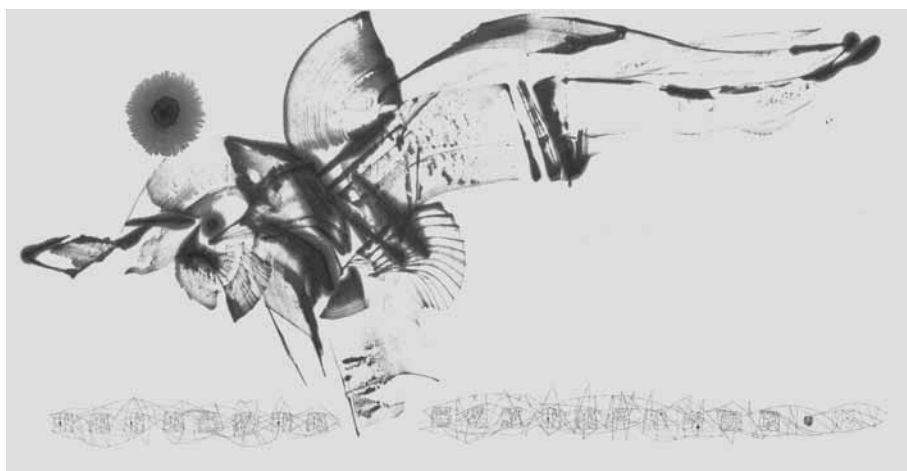
干支文字



干支文字



千葉
蒼玄



「いのり」

70×137cm

古典鑑賞

(477)

金文② (散氏盤)

※落款を必ず入れる。署名、もしくは○○臨(押印のみも可)

〈解説〉散氏盤の出土年月、場所は分かっていない。嘉慶年間に宮中に入ったが、やがて所在不明となり、1924年に紫禁城の養心殿の物置から発見されたという。銘文は19行360字。内容は矢と散との間で紛争があり、それを収めるため、矢が散に賠償として領土の

一部を割譲することを銘記した文書である。西周の金文は時代とともに縦長になっていくが、散氏盤の字形は扁平で横への拡がりが強調されている。また、ゆがみによる独特な趣きも魅力的である。可愛らしいと感じる人もいるだろう。

(編集部)

漢字研究部臨書課題

Ⅱ (半紙普通判・縦使用) 左記掲載部分より何文字臨書してもよい。

特別研究部臨書課題

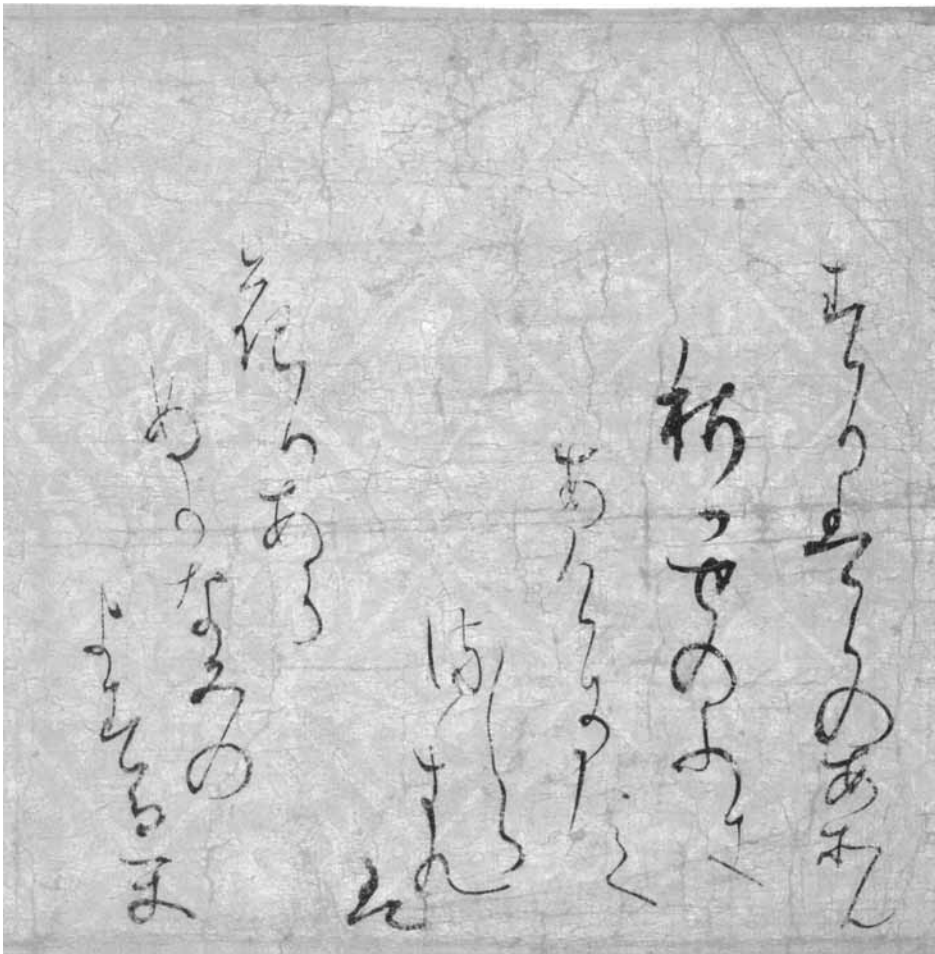
Ⅱ (A:大作の部 毎日展覧会員・倉サイズ以内、2×6尺・金紙も可) 当該古典の左記掲載部分以外も可。
(B:小品の部 半切以上半切以内・金紙以内も可)(A・B縦貫用)



用大猷散邑廼即散用田廩／自清涉呂南至于大沽／矢呂陸／矢至于邊柳道／涉清陸寧畎麥陟呂西去

(故宮博物院「台北」蔵)

※掲載図版原寸、ただし行立てについては変更しています。



（野村美術館蔵）

※掲載図版原寸

※落款を必ず入れる。署名、もしくは〇〇臨（押印のみも可）

※古筆は原寸（以上も可）で臨書しましょう。

〈よみ〉
 すがはらのあそむ
 秋かぜのふき
 あげにたて
 るしらぎくは
 花かあら
 ぬかなみの
 よするか

〈解説〉寸松庵色紙の「散らし」は様々な名称で呼ばれるが、この1枚は「左右分裂式」に分類されるだろう。右集団が6行、左集団が3行で、右が主、左が従である。
 各行が右に流れるため、左に傾いて見えるが、1行目の「春可盤」を右に傾けたことと、この行に数カ所の右上から左下への直線を配置したことで全体を引き締めている。
 また、行間を観察すると、1行目と2行目の間、3行目と4行目の間が微妙に広くなっている。行頭の「春」「秋」「あ」「流」の位置を見ればそれは明らかである。行頭の字の配置は、臨書のポイントのひとつと言える。
 （編集部）

かな研究部臨書課題

（半紙普通判（料紙可）・縦長に使用）別紙を裁断して貼付も可。半懷紙は半紙サイズに切って使用のこと。上記の古筆の掲載部分より歌一首以上を書く。（全臨も可）

特別研究部臨書課題

A. 大作の部＝毎日展審査会員・会員サイズ以内、2×6尺・全紙も可
 B. 小品の部＝半切 $\frac{1}{2}$ 以上、半切以内（縦横自由）、全紙 $\frac{1}{2}$ 以内も可
 <いずれも上記の掲載以外も可。>

漢字規定 初段以上 【3月15日締めきり】 用紙 半紙普通判

名越蒼竹選書

習い方解説 (2)

名越蒼竹

古木鳴寒鳥

(魏徴)

(古木寒鳥鳴く)

古い木の枝で冬の鳥が淋しげに鳴く。

行草書では次々変化していく墨の濃淡・潤濁と、文字(点画)の大小・長短・肥瘦、字間や行間の疎密といった様々な要素が〈自然〉に行われ、結果的に全体の調和において納得感が得られることが理想です。

大家なら、章法を固定せず気楽に書き始めても、最終的にうまくまとめることができるでしょう。ただその力が身につくまでは最初の「設計」が必要です。それがないと単調で魅力のない作品か、支離滅裂でまとまりのない作品か、どちらかになってしまいう危険性があるのです。まずは優れた作品の臨書に数多く取り組んで、文字のデフォルメ(外形と疎密がポイントです)の具体例と原理を学び、臨機応変の技を自分のものにしましょう。



古木鳴寒鳥 よみ(古木寒鳥鳴く)

書体Ⅱ自由

漢字規定 秀級以下 【3月15日締めきり】 用紙 半紙普通判

田村鄭雲選書

習い方解説 (2)

田村鄭雲

溫故知新 (論語)

(故きを温ねて新しきを知る)

昔のことをよく研究し、今突き当たっている問題や新しいことを考えること。

書の学習でいえば古典を研究して今の自分を見つめ直し、新しい書作に挑戦することでしょうか。

今回は鄭道昭の書を参考に書きました。鄭道昭は北魏の時代に光州刺史等の職に就き、現在の山東省の領内を視察し、自ら山に登って「天柱山」「雲峰山」「右闕」「左闕」「当門石坐」のような名前を付け、道教思想に基づいた文章を作り、碑文を刻みました。

岩肌に直接刻まれた書は拓本では輪郭がはっきりせず、方筆の起筆や運筆のリズムはよく解りません。しかし、本物の磨崖碑を見るとその書の素晴らしさが伝わります。基本的には前回の造像記と同様な筆法と思われませんが、鄭道昭が大自然の中で自分の思いを雄大に表現することにより生命感溢れる魅力ある書が完成されたと思像されます。

書作にあたっては、俗世を忘れ雲峰山に登った開放的な気持ちで挑んでください。

溫故知新

鄭雲

新故

溫故知新

よみ (故きを温ねて新しきを知る)

書体 楷書

かな規定 初段以上 【3月15日締めきり】 用紙 半紙普通判（料紙可）

松村くに子選書

習い方解説 (2)

松村くに子

雨ふるやうすす焼くる山のなり

（芥川龍之介）

しとしと雨が降っている中、枯れ草を焼いている煙がうっすらと立ち上っている。

雨が降りそうな時に野火が行なわれましたが、子どもの頃よく見かけた光景です。降って来ないうちに帰宅しようと煙の中を勢いよく走りぬけたことを思い出します。

2行目の「や」を右にずらし、行の変化と右側下方の余白をより効果的に狙いました。4行目は枯れ草が燃える様子をイメージしながら渴筆で大きく展開します。

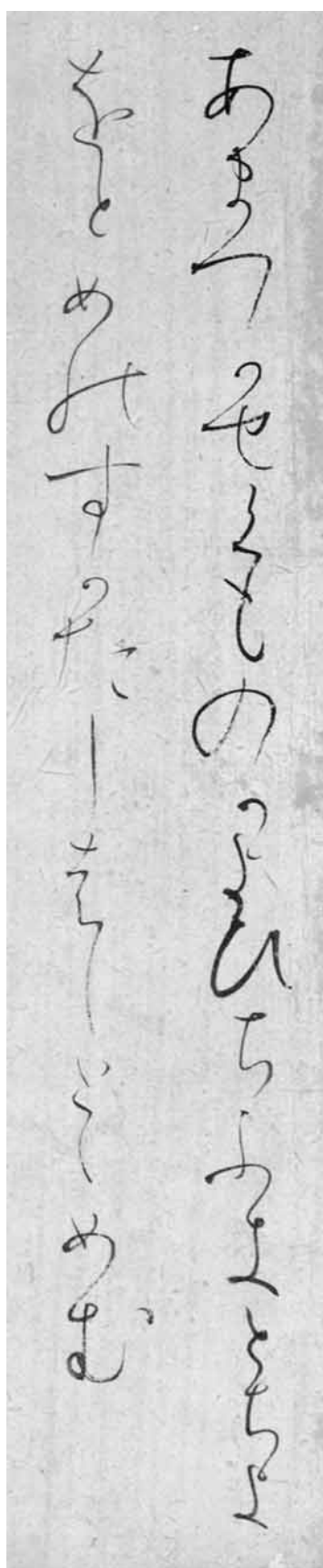
墨継ぎは「なり」です。書き出しの墨量を少し控えて「うす」で継いでも良いでしょう。また、違った表情になるかと思えます。

よみ方 雨ふる（流）やうすす（ゝゝ）焼く（久）る山のなり

創作

*料紙は半紙版（33.0×24.5cm）を使用しましょう。半懐紙は上記のサイズに切って下さい。

かな規定 秀級以下 【3月15日締めきり】 用紙 半紙タテ1/2 (料紙可) (たて32センチ・よこ12センチ)
掲載写真の和歌を臨書する。部分臨書も可。〈注〉署名は「〇〇臨」。粘葉本和漢朗詠集 (掲載写真拡大120%)

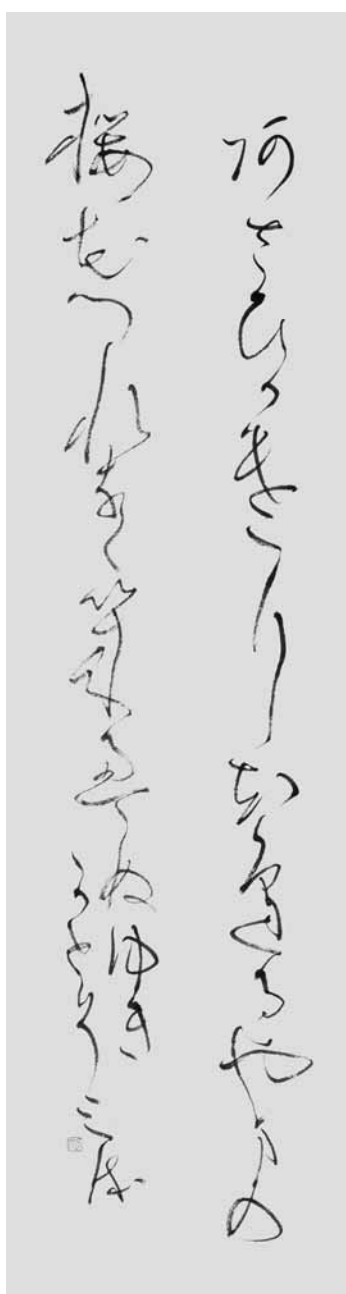


よみ方 あまつか^可ぜく^久ものか^可よひ^可ぢふ^支きと^支ぢよ
をとめ^能の^可すが^可たし^者ばしと^者ぢめむ

歌意 空吹く風よ、もっと激しく吹いて雲の中の天女の通り道を閉ざして下さい。美しく舞う天女のこの姿を少しでも長く地上に留めておきたいから。

かな条幅規定 【3月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切 (料紙可)

勝山初美選書



よみ方 朝^可(阿^可)き^可日^可(ひ)か^可(可)げ^可(遣)に^可(耳)ほ^可(本)へ^可(邊)る^可山^可(や)万^可の^可桜^可花^可
つれな^可(奈)く^可(久)き^可(幾)え^可(盈)ぬ^可雪^可(ゆ)きか^可(可)と^可ぞ^可(曾)み^可(三)る^可(流)

創作

※タテ形式に限る

習い方解説 (2)

勝山初美

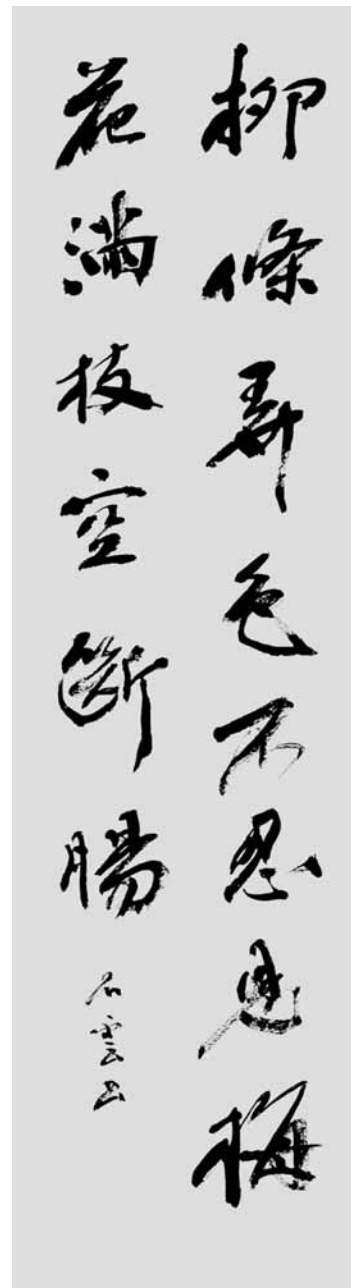
朝^き日^ひかけにほへる^{やま}山の^{さくら}桜^{はな}花
つれなく^{ゆき}えぬ^{ゆき}雪^{ゆき}かとぞ^ぞみる

(藤原有家「新古今集」)

朝日が照り映えている山の桜花は、春の日ざしにも平然として消えることのない雪かと思ってしまう。構成は基本形です。2行目の行尾を徐々に右へ流し、その左隣りへやや小さな文字で寄り添うようにし、2行目との一体感を出しました。墨継ぎはゆです。

漢字条幅規定 初段以上 【3月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

小竹石雲 選書



柳條弄色不忍見 梅花滿枝空斷腸
(柳條色を弄して見るに忍びず 梅花枝に満ちて空しく断腸)

書体＝自由

漢字条幅規定 秀級以下 【3月15日締めきり】 用紙 小画仙紙半切

飯沼恵鳳 選書



徳不孤必有隣 (論語)
(徳は孤ならず必ず隣り有り)

書体＝自由

習い方解説 (2)

小竹石雲

虚飾を避け、堅実で骨力のある作風を心掛けて制作してみました。蘇軾の人間性を脳裏に置き、墨気が紙背にまで届く頑健な筆線になるよう心掛けました。それぞれの文字は安定感を保つように墨量を多くし、偏平に書いてみました。短い縦画に対し横画の振りを大きくしながら流れが出るように心に余裕をもたせて書いてみました。

※タテ形式に限る

習い方解説 (2)

飯沼恵鳳

大意は「徳のある人は孤立することなく、必ずそれに賛同する人が集まる」です。

筆は6mm×7cmの羊毛長鋒を使用。

6文字は木簡調を基調とし、筆を自由自在に運筆、穂先の開閉と直筆・側筆で、多彩な線質になるように工夫してみました。

字形はユーモアにディフォルメし、遊び心で書いてみました。

遠き山に日は落ちて
星は空をちりばめぬ
きょうのわざをなし終えて
心軽く安らえば
風は涼しこの夕べ 紅瑤書

◇用紙 ハガキ大(14.8×10cm)の白紙を使用
◇黒インクのペンを使用(ボールペン・フェルトペン可)

書体＝自由

【注意】

用紙の大きさにばらつきが見られます。

用紙サイズ(ハガキ大14.8×10cm)を守ってください。

習い方解説 (2)

倉林紅瑤

人々に長く歌い継がれてきた名曲の一つである『遠き山に日は落ちて』は、ドヴォルザーク作曲交響曲第9番「新世界より」第2楽章が原曲です。このメロディーに、音楽評論家で作詞家でもある堀内敬三(明治30年〜昭和58年)が日本語の詩をつけたものです。一日の終わりの穏やかな気持ちが歌われています。

「平がな」を自然になめらかにつなげるためには、「連綿の休みどころ」の要領を正確に習得することが欠かせません。2字連綿の場合、1文字目から2文字目の最初の部分まで続けて止める(休む)のが基本です。2文字目の最初の部分までが1文字目のリズムの領域と考えます。

遠き山に日は落ちて
星は空をちりばめぬ
きょうのわざをなし終えて
心軽く安らえば
風は涼しこの夕べ ○○書

季節の言葉・七十二候より

清明第三候

虹始めて見るあらわ

穀雨第二候

鳴鳩いかるが其の羽を払うつ

立夏第二候

蚯蚓みみず出いづ

小満第三候

麦秋至る

岩垣若翠

(掲載手本85%に縮小)

- ◇小筆・筆ペン・サインペンなどを使用 署名は各自の姓名(号)を
- ◇用紙は普通版半紙横 $\frac{1}{2}$ (24.5×16.5cm) B5版コピー用紙(26.0×18.1cm)も可
- ◇所定の出品券を作品の右下に貼る

季節の言葉・七十二候より／清明第三候 虹始めて見る／穀雨第二候 鳴鳩其の羽を払つ
立夏第二候 蚯蚓出づ／小満第三候 麦秋至る／氏名

ペン字部 師範 永井 伯泉

向勢を中心にした文字と余白とのバランスが心地よい作品。温かな線で人情味を感じ魅力あり。
◎ペン字部総評 穏やかさを感じる作品が多かった。もたつく連綿線が見えたので練習しよう。
(榮軒評)

漢字条幅部 師範 小川 白柳

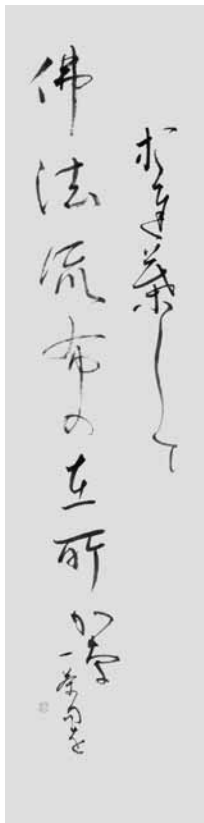
豊かな大河の流れを感じさせる雄大な呼吸で静かに力強く運筆されている。望むらくは押印を。



◎漢字条幅部総評 今回は行草作品が多かった。章法の甘さが気になる。推敲と書き込みの繰り返しで高まっていくので...。
(石雲評)

かな条幅部 五段 田畑寿美子

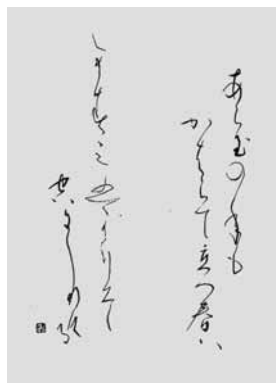
潤渾の変化が品良く美しい。字形も良く行間の余白が全体を引き締めて洗練された作品に仕上がった。



◎かな条幅部総評 漢字の多い俳句をかな作品にする苦勞が伺えたが時間をかけた作には魅力を感じた。「遅」は要確認。
(峰子評)

かな部 師範 篠田恵美子
全体のムードが他と異なり目を引きました。字形もリズムも独特の風格があります。墨色も美しい。

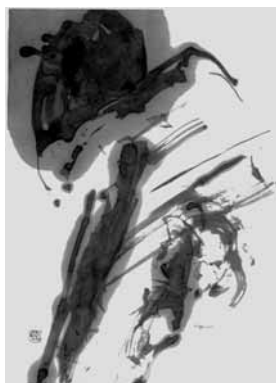
◎かな部総評 比較的良好に書けていましたが、空の草書に誤字が多く残念でした。勘違いかと思いますが次回のため確認を。
(洋子評)



前衛書部 特選 佐藤 奎山

紙面を断ち切る迫力ある線が見事。淡墨の広がる滲みと渴筆線・余白のコントラストが美しい。

◎前衛書部総評 創意のイメージを大切にしたい力作が多数の一方、まとめ切れない作も多数。
(蓮紅評)



漢字部 師範 十川 照子

漢簡を基に創作。藏鋒による線が重厚で、躍動感に溢れる。構成も大胆で、見る者を圧倒する。

◎漢字部総評 上級は行草書に拠る作品に、線が上質で見応えのあるものが目についた。線を鍛える不断の学書が大切です。
(萬城評)



現代詩文書部 特選 梶原 一美

淡墨で大胆な筆致、大字と小字の組合せ、墨量の変化等が調和して奥行きを感じ、美しい作となる。

◎現代詩文書部総評 上位充実の反面粗雑作も目立つ。古典に則った文字表現を求めたい。
(邑峰評)

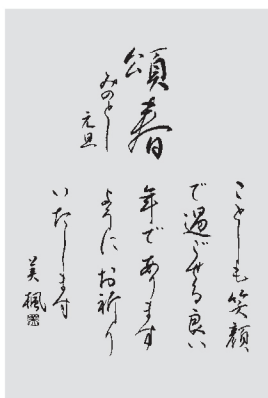


選評 鈴木 せつ子

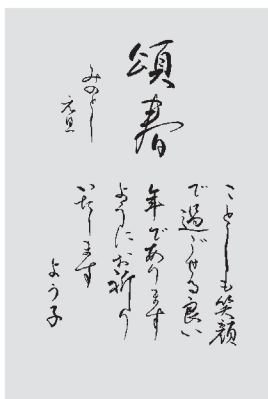
◎実用書部総評

筆の弾力を生かした好感の持てた明るくリズムある作品が多く見られた。実用書は漢字とかなのバランス、特に中心を意識して書くこと。(せつ子評)

特選 奥村 美楓
流麗さの中に抑揚を感じられる引きしまった線で、華やかな作品。



特選 加藤 翠陽
漢字とかなが上手に調和し、連綿線も自然の流れで完成度が高い。



青連	土気	深大	春汀	もく	住	華仙	紅街	有秋	紅瑤	常盤	幸扇	千葉	清月	秀	高書	宗苑	ここ	大雲	特選
小野	及川	白井	石井	池上	青木	山口	中嶋	高橋	須田	水津	井上	安藤	浅野	作(50音)	永井	茂木	加藤	奥村	
朱星	明	綾乃	光津	美津子	藤漣	雪翠	小樹	香舟	恵風	洋硯	叙孝	弘美	京子		郁子	伯水	絢水	翠陽	
一草	吉岡	倉吉	四枝	芳蘭	澄春	素雪	深大	倉吉	こた	竹美	樹原	書游	竹美	入選(50音)	やま	中川	紅瑤	上泉	芳蘭
中村	土井	鳥山	丹	高木	坂本	久下	吉川	北爪	菊池	神田	葛原	小野	秋		横山	山口	原島	中村	小田
一琴	孝子	千恵里	美枝	規芳	初江	香奈	町子	鼓祥	恭子	加奈子	恵美	きよこ	龍華		蘭子	蒼舟	春汀	シゲ子	千久保
																			典子
																			八街
																			墨遊
																			西川
																			新村
																			翠芳

前衛書部(特選)

現代詩文書部(特選)



甘雨 朱紅 郁苑 珠莉
宿墨の遠近あり、印位一考
リズム感と流動線のコラボ
余白に響く線が温かい
濃墨の深い表現に遠近あり
旋律を奏でる明るい作

眞利子 涌翠 優子 千晶
都会のビル群が創造性あり
重厚な筆致と余白美表現
潤渾線の交差と動線美
淡墨の優美、直側筆が融合
躍動感・線の切れ味見事

選評 太田 蓮 紅

黄竹 美雅 惠由 小和 彩香
大胆な構成で流れあり
文字群の配置が面白い作
墨量豊かで温和なムード
空中に筆が舞う書き振り
淡々と味のある線で表現
弾力もある鋭利な線表現
文字が自然に横に流れる
味のある線で墨色美しい
蛇を中心によくまとめた

景琴 彩真 四雄 雅紀 陽美
余白を生かした横書き
線質の練度が高く秀逸
自在な細太の変化、大佳
独特の強弱のリズム貫く
運筆の大きさが際立つ
線質の練度が高く秀逸
自在な細太の変化、大佳
筆の開閉自然で豊かさあり
淡墨による滲みが効果的
文字の内外の白が美しい
強弱と余白の変化大成功
強い線と紙面を引き締める

選評 大平 邑 峰

今月の

特別研究部優秀作品(特選)

選評 小竹石雲 後藤大峰 千葉蒼玄 平川峰子

臨書 (菊月)

新井恵子

「山家心中集」



◆一字一字を注意しながら、特に横画に神経を使って臨書した努力が伺える。紙にくい込む強い線条が全体を魅力的にした。墨の濃淡も美しい。

新井恵子臨

(峰子評)

部分拡大

136×35cm

現代詩文書 (宗苑)

臼井真理

「旅」丸山勝久の詩



◆自由奔放な筆の振りから醸し出された温潤な筆線が観者を魅了する。懷ろを広々ととった字形と墨だまりが効果的に紙面に展開し、情趣豊かな作となる。

臼井真理書

(石雲評)

135×35cm

前衛書 (秀水)

伏津玲子

「憩」



◆おだやかな筆致で上部の墨から下部の渴筆まで自然な流れである。墨色に今一歩変化がほしい。

伏津玲子書

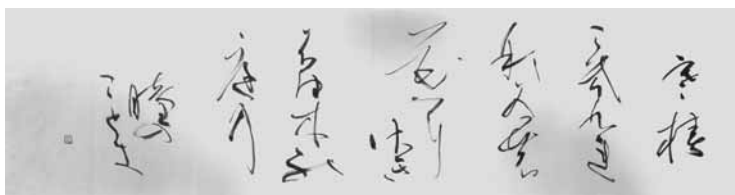
(蒼玄評)

135×37cm

小品の部

かな

(創珠) 阿部珠翠 「窪田空穂のうた」

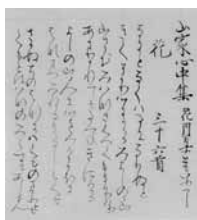


阿部珠翠書

35×135cm

◆かな作品の横書きは行間の余白に神経を使って構成しますが、文字の大小・潤渇に変化をつけながらリズムのある線条で美しく仕上げています。

(峰子評)



〈小品の部〉

創作の部(40点)

漢字 17点

かな 12点

現代 19点

篆刻 0点

前衛 12点

臨書の部(43点)

漢字 39点

かな 4点

総出品点数

83点

〈特選候補者〉

(創作の部)

「漢字」

粹仙 藤井 龍仙

翠柳 加藤 紫翠

「かな」

高崎 矢口 登江

「現代詩」

蒼原 佐藤 奎山

一弦 渋谷 望江

宗苑 茂木 絢香

蒼風 高橋 蒼香

植松 梅田 紅雨

「前衛」

大拙 佐藤 美子

蓮紅 本田 美雪

(臨書の部)

「漢字」

華祥 加藤 雅芳

春城 東原 春城

堂光 佐藤 光耀

澄春 土屋 恵仙

大雲 相楽 天翔

八雲 相楽 雲卿

「かな」

清月 境野 和子

大作の部

前衛書

(容洲)

阿部 邑里

「冬茜」



阿部 邑里 書

79×181cm

◆門のような造形で、左右に大きな柱を配置し堂々とした大きなさを感じる。中心の円も小さいが、動きを大きく保って可。
(蒼玄評)

臨書

(伊呂)

鈴木 英晴

「山家心中集」



鈴木 英晴 臨

176×85cm

臨書

(八街)

三浦 英樹

「争坐位文稿」

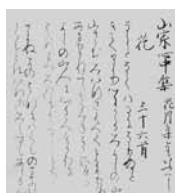


三浦 英樹 臨

135×70cm

◆顔真卿独特の肉太の重量感のある雰囲気をよく捉えている。それを自身の感覚で確実に表現し臨書している手腕に拍手。
(大峰評)

部分拡大

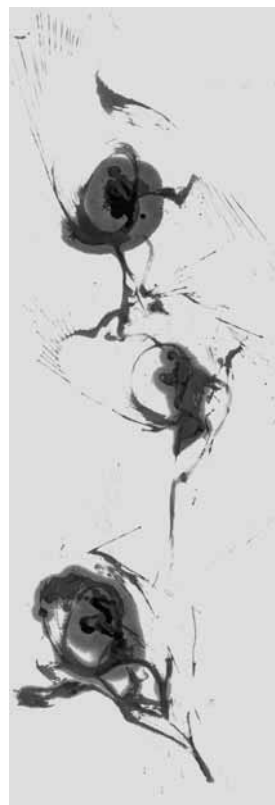


◆まるで古筆そのものを見ている錯覚になっってしまうような臨書で、細い線条の抑揚は特に魅力的。行間の余白も美しい。
(峰子評)

前衛書

(秀恵)

阿部 雅悠 「縁」



阿部 雅悠 書

180×60cm

◆3か所の丸をリズムよく配置し、まわりの空間の白を生かしている。墨の飛びも効果的で華やかさを増している。墨のにじみも秀逸。
(蒼玄評)

〈大作の部〉

創作の部(36点)

漢字 3点

かな 4点

現代 10点

前衛 19点

臨書の部(12点)

漢字 11点

かな 1点

総出品点数

48点

〈特選候補者〉

〔創作の部〕

〔漢字〕

大拙 昌中 成山

〔かな〕

潮音 齋藤 杏邑

水荃 清水 蘭舟

〔現代詩〕

大雲 藤井 花香

大雲 奥村 美楓

紅梅 池田 沙静

玄穹 尾形 紅霞

翠苑 佐々木 豊苑

〔前衛〕

白珠 工藤 史音

柳賢 二上 香柳

月華 相馬 朱郷

篤信 三浦 朱鳳

紅瑤 廣田 紫

大拙 阿部 俊吾

白珠 伊藤 千翔

秀水 門脇 信子

〔漢字〕

澄春 新行内 芳蘭

大雲 舟實 恵美

素雪 坂本 芳博

紅瑤 相澤 敦子

漢字研究部
(争坐位文稿)

選評 稲垣小燕

今月のホープ作品



阿部 邑里

漢字研究部 特選 阿部 邑里
紙面いっぱい、に氣力が溢れる作。空間も美しく捉えている。筆の弾力を生かし、丸味のある線は力強さを表現し、かつ豊かさを醸し出している素晴らしい臨書です。落款にも意を注がれるよう望みます。

◎漢字研究部総評

書を学ぶ者にとって必修の古典であるだけに、良く特徴を捉えた作がある反面、荒っぽ

く丁寧さに欠ける作も多数あって誠に残念に思います。

臨書するに当たってはまずは徹底して原本に忠実に形臨することが大事です。その過程において起筆、収筆、転折等用筆法を学び筆力を養うことができていきます。折角の学書の場合です。古典とじっくりと丁寧に向き合う質の高い学びの場でありたいと願っています。



綾眞睦蒼藤翠
砂 子月香象照



良瑤篁恵谷
濡 子翠心子秀



龍美藍琴恵悦
貞梢水燐美子



明光紅芳沙麗
恵葉霞博莉流

32

審査会員の部 結果発表 (出品数 漢字26点・かな15点)

選評 種谷萬城・下谷洋子
漢字秀逸作



北嶋 蒼湖



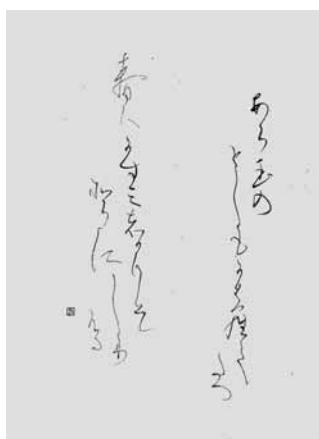
板橋 雅邦



西川 藤象



柿沼 彩香



茂木 絢水



清水 蘭舟

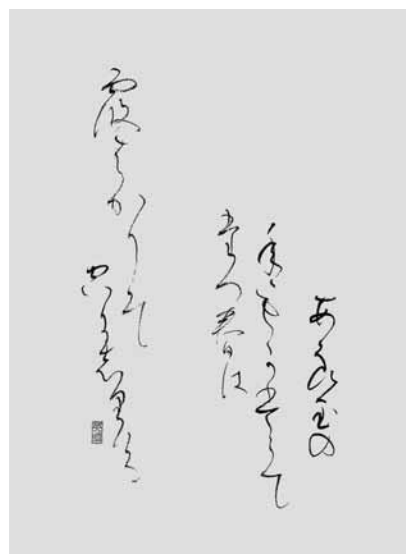
〈次点・50音順〉

茂木 絢水



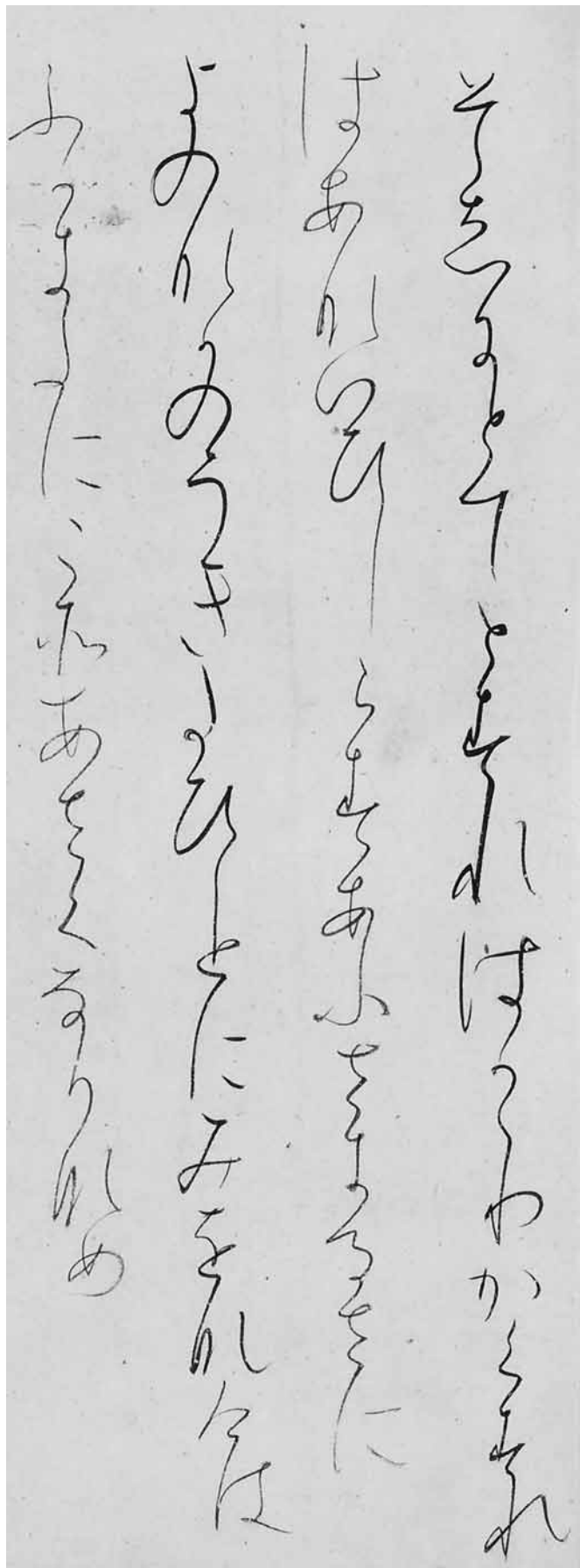
ゆったりとした動きが生んだ、流麗で柔軟な線が美しい。温和で、しっとり、なめらかな線に心が和む。上品で温雅な草書作品に技量の高さが窺える。
(萬城評)

かな秀逸作

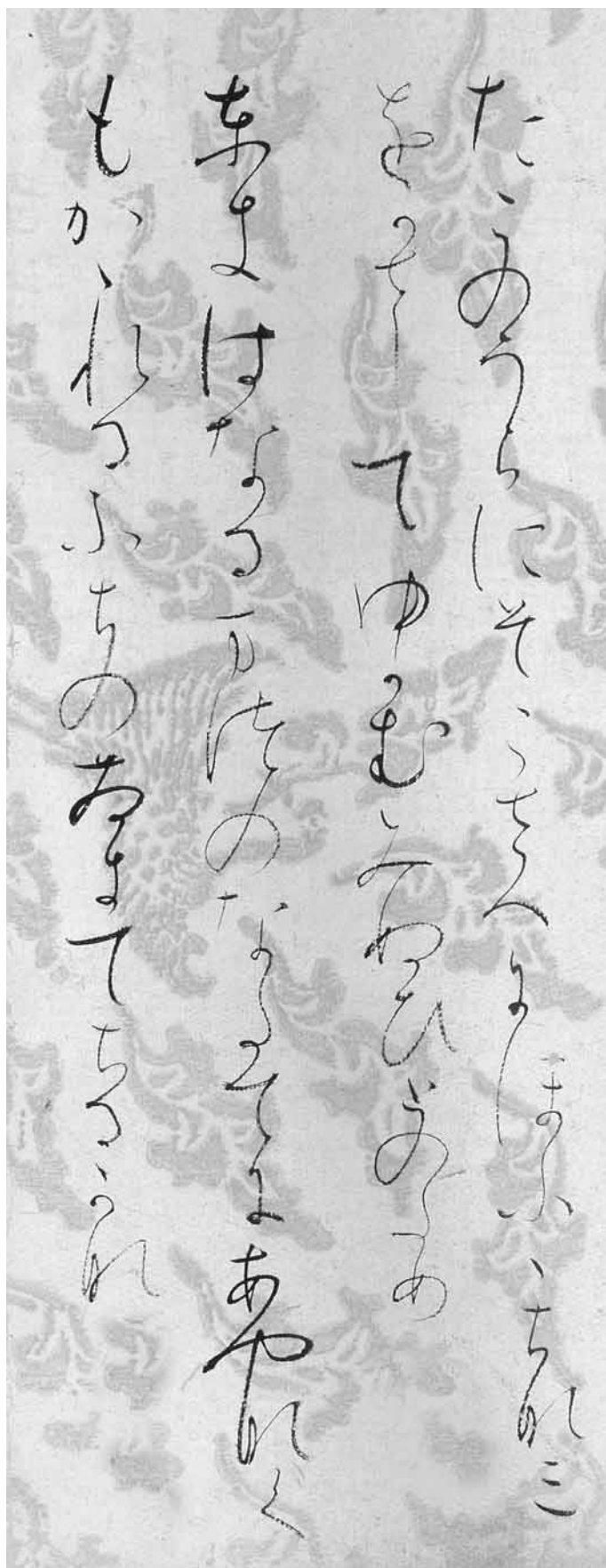


鈴木 英晴

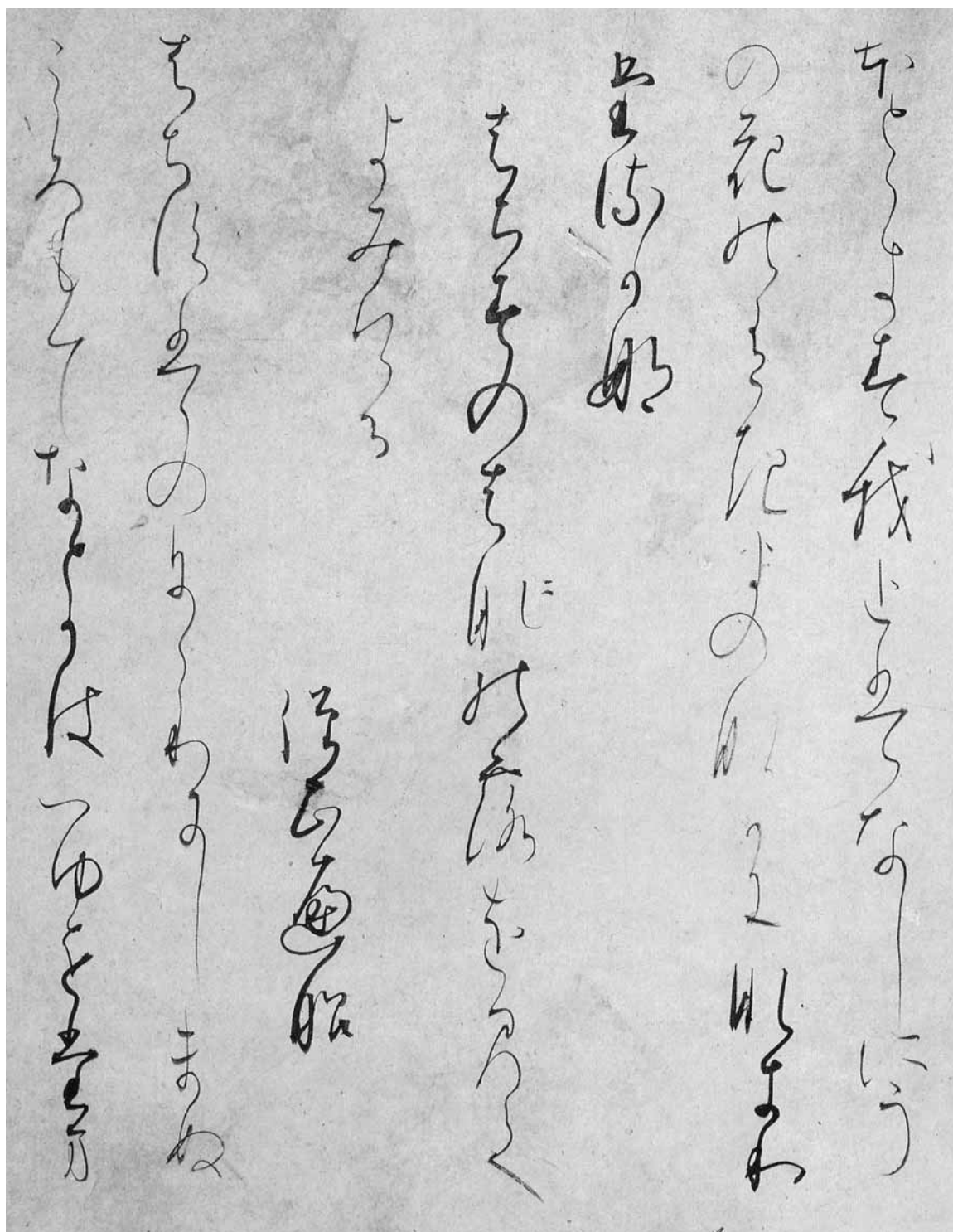
いわゆる、かな的流れの美しい作品は他にもありましたが、この作品には作者の強い意志(思い)を感じました。技術を超えたエネルギーが弾けています。
(洋子評)



そゑにとと^尔とす^春れば^可か^利く^久す^春れ
ば^那あ^那ない^春ひ^多し^多ら^支ず^支あ^支ふ^支さ^支き^支る^支さ^支に
よ^那の^可な^可か^多の^多う^多き^多た^多び^多ご^多と^多に^多み^多を^多な^多げ^多ば
ふ^可か^支き^支た^支に^支こ^支そ^支あ^支さ^支く^支な^支り^支な^支め^支



たごのうらにそこさへにほふちなみ^{那三}
をかざしてゆかむみぬひとのため^多
ときはなるまつ^{東支}のなだてにあやなく^{那久}
もかゝれるふぢのさきてちるかな^{散支}



＜原寸大＞

本 文筆
ほととぎす我とはなしにう

能 有起
の花のうきよのなかなになきわ

筆 流可那
たるかな

者 摩
はちすのはな露を見て

介 介
よみける

僧 正遍昭

者 須藤
はちすばのにごりにしまぬ

可 可
ころもてなどかはつゆをたま

鉤 4行目
「たま」のあとに

右に「三」が添えられてい
ますが、これは見せ消ちと
いって、訂正の印です。書
かなくてよいです。

鉤 8行目
「たま」のあとに
歌は続きますが、原寸で載
せることを優先したため、
ここで切りました。続きを
書く必要はありません。

寸松庵色紙

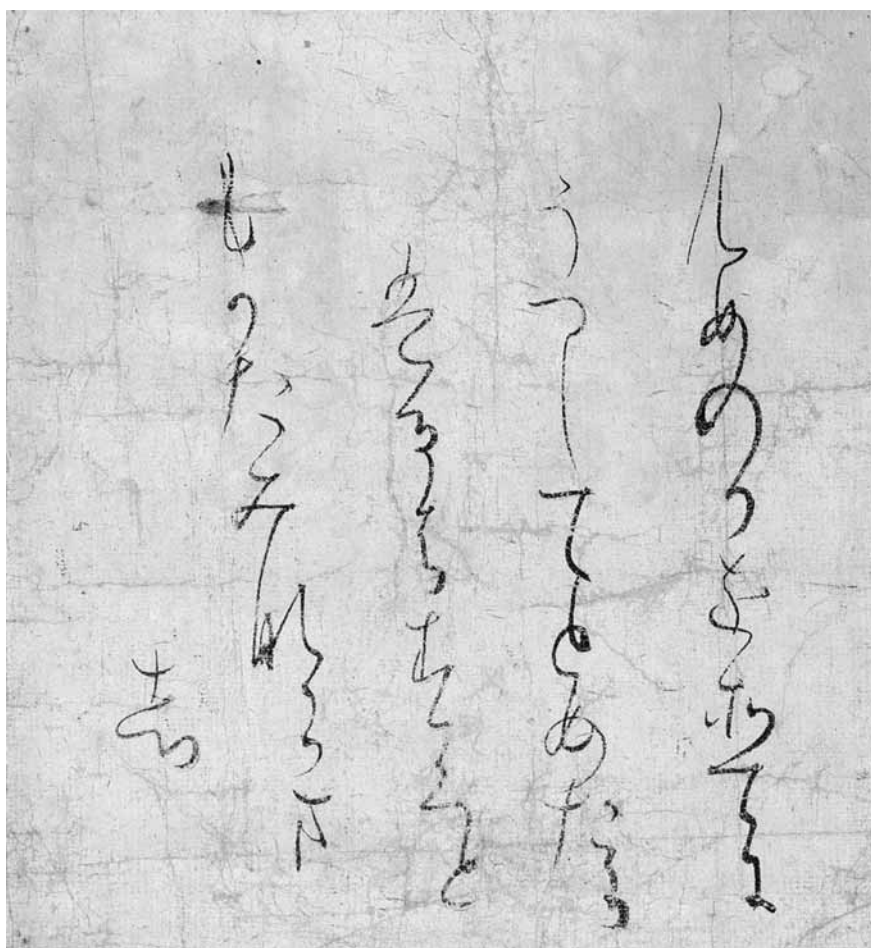
かな部

第三種

半紙に枠をとり写真掲載の和歌を書く

△原寸大▽

- ・料紙可
- ・たて12センチ×よこ11.4センチ原寸大の枠を半紙にとり、その中に書くこと。
- ・落款は枠外に書く。○○臨
- ・印のみも可(枠外に押印)
- ・料紙を裁断して貼付してもよい。



むめのかをそでに

うつしてとめたら(ば)

はるはすぐと

もかたみならま

し

ご注意!!

名前のかき方

- ◎どの部も落款を入れる。
- ・創作は○○書と書く。
- (かな部・かな条幅部は印のみも可)
- ・臨書は○○臨と書く。
- (かな部・かな条幅部は印のみも可)

〔2025春季特別昇段級試験参考手本〕

◇春の特別昇段級試験の課題手本（創作作品）を掲載しました。参考にしてください。
（編集部）

漢字部

第二種

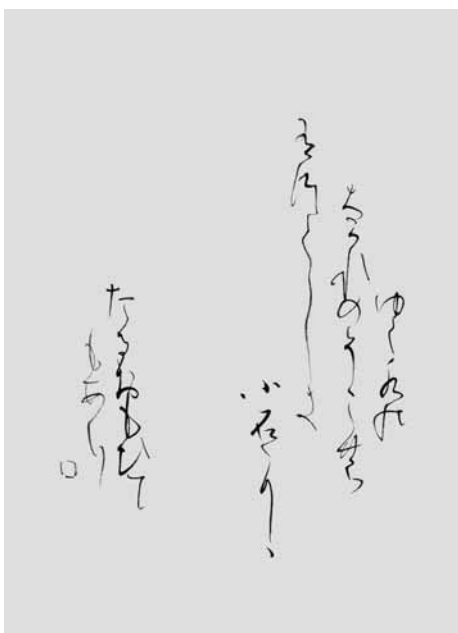
◇創作・行書

卷土重来（けんどちゅうらい）



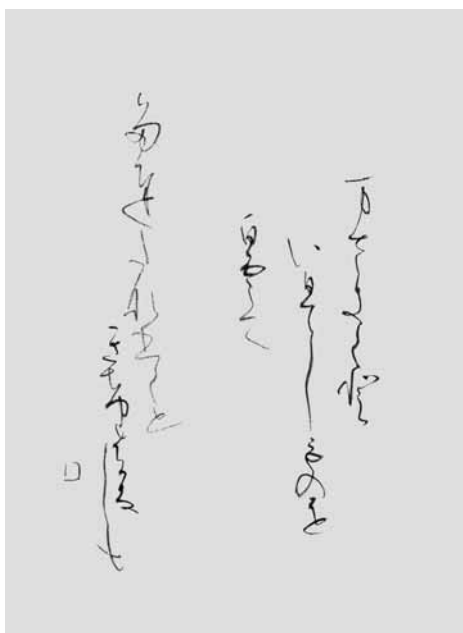
（杜牧）

第三種 ◇創作（和歌）



逝く水の流れの底の美しき小石に似たる思ひ出もあり（湯川秀樹）
よみ方 逝（ゆ）く（久）水の（能）流（奈可）れの底（曾）この（農）美（有徒）久し
き（支）小石に（耳）似（へ）たる思（おも）ひ出（で）てもあり

第二種 ◇創作（和歌）



ま幸くと言ひてしものを白雲に立ちたなびくと聞けば悲しも天伴家持
よみ方 ま（万）幸（さ）さく（久）と（登）言（い）ひ（旦）てしも（毛）のを白雲に（二）立
（多）ち（運）た（多）な（那）び（悲）く（久）と（聞）き（け）（希）ば（者）悲（可）奈（し）も

かな部

〈楷書〉

花開不逐春

第一種 ◇創作（楷書または行書）

〈行書〉

花開不逐春

花開不逐春（花開くも春を逐わず）

（張信）

第二種 ◇創作・行書

端州石工巧如神
踏天磨刀割紫雲

端州石工巧如神 踏天磨刀割紫雲
（端州の石工巧みなること神の如し天を踏み磨ける刀もて紫雲を割く）

（李賀）

第三種 ◇創作・楷書

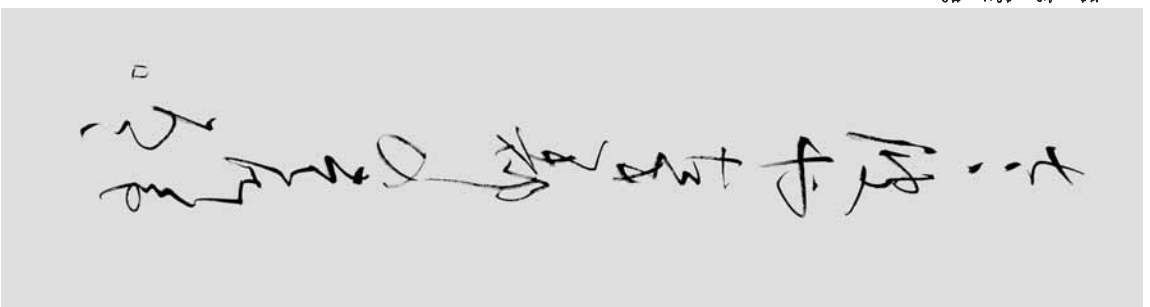
圓毫促點聲靜新
硯寬頑何足云

圓毫促點聲靜新 硯寬頑何足云
（圓毫を促せば声靜新 硯は寬頑何ぞ云に足らん）

（李賀）

かな条幅部

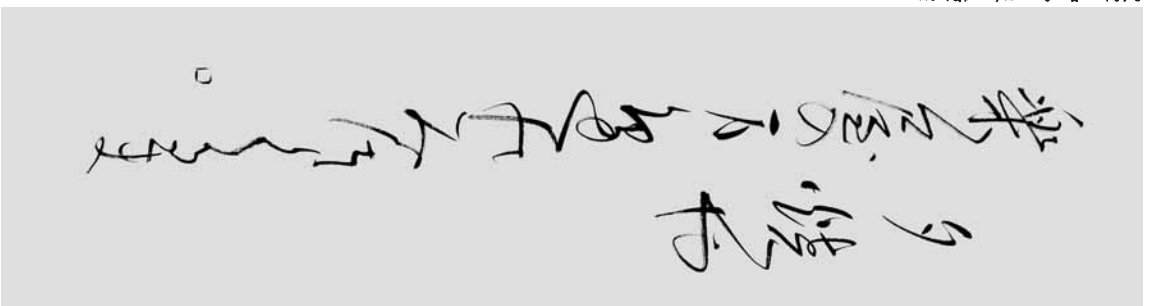
第一種 ◇創作(俳句)



(木活 晴雪)

ちよ波や古き都の初もつ
よみ方 ちよ(く)波や古き都の初(春徒)も(主)つ

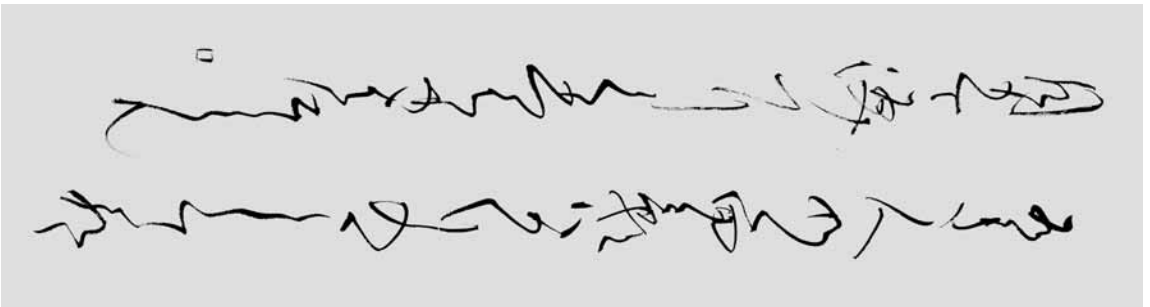
第二種 ◇創作(俳句)



(初代中村吉右衛門)

夕焼や楽屋の前の水車
よみ方 夕焼や楽屋の前(万邊)の(絶)水車(み使久るま)

第二種 ◇創作(短歌)



(木活 良雄)

暈き人の面影ばかり残してや月は涙に隠りはつらむ
よみ方 暈(有き)人の(乃)面影は(ひ)か(可)り残(の)してや(耶)月は(離)涙に(可)隠(久)き(著)り(利)は(若)つ(徒)らむ(主)

※臨書作品は、1月号50～53、2月号46～49ページの写真掲載の古典・
古筆の中から、指定文字数を臨書して下さい。

※作品締め切りは4月15日(火)です。

(編集部)

ペン 字部

◇楷書

第一種 楷書 (1枚)
第二種 楷書・行書 (計2枚)

特別昇段級試験・和文解説

◎かな部第二種

ま幸くと言ひてしものを白雲に立ち
たなびくと聞けば悲しも(大伴家持)

〔口訳〕ご無事でと言ってお別れしたのに、あなたが白雲となって空にたなびいていると聞いて、悲しいことだよ。

〔解説〕家持は天平18年(746年)に越中守として現地に赴任する。出発に際し、弟の書持が見送ってくれたが、彼の訃報を越中で聞くこととなった。火葬の煙が白雲になったことを歌うが、雲に弟の靈魂を見ているのである。なお、越中守時代は家持の歌の才能が開花する時期にあたる。

◎かな部第三種

近く水の流れの底の美しき小石に似
たる思ひ出もあり(湯川秀樹)

〔口訳〕流れゆく川の流れの底に眠る美しい小石、そんなひそやかな思い出も私の少年時代にはあったことだ。

〔解説〕日本人として初めてノーベル賞を受賞した湯川博士は理論物理学の泰斗であるが、文学にも造詣が深かった。この歌は、視点が順次、水底の小石に降りてゆき、それを思い出にたとえたところに工夫がある。上の句の「の」のつながりが快い。

◎かな条幅部第一種
さざ波や古き都の初もろこ

(内藤鳴雪)

〔口訳〕さざ波が美しい琵琶湖には、かつて近江大津宮があったが、今、訪ねてみると今年初めての名物の諸子が食事に出されたことだ。

〔解説〕鳴雪は明治から大正期にかけて活躍した俳人。早春の美味な魚を前にした句であるが、万葉集で歌われた、壬申の乱で滅んだ古都を思わず懐古してしまふのが詩心というものである。

◎かな条幅部第二種(俳句)

夕焼や楽屋の前の水車

(初代中村吉右衛門)

〔口訳〕楽屋で次の舞台を待っていて、ふと外を見ると川のほとりの水車が夕焼の下でゆるやかに回っているよ。

〔解説〕作者は言わずと知れた歌舞伎の名優。虚子門の俳人でもあった。静岡県三島での旅興(行中)の作。三島大社が有名であるが、清らかな川が町中を流れている土地柄でもある。当時は水車も多く見られたのであろう。

◎同(短歌)

憂き人の面影ばかり残してや月は涙に曇りはつらむ(二条良基)

〔口訳〕薄情なあなたの仕打ちに、私は涙で月が曇って消えてしまふほどなのに、どうしてそこに、あなたの面影だけははっきりと残っているのだろう。

〔解説〕月が涙で曇るというのはありふれた表現だが、見えなくなった月がいとしい人の丸い顔に見えるとしたのが新しい着想。良基は南北朝時代の人で、摂政関白を務めた。連歌集『菟玖波集』の撰者でもある。

◇行書

装飾経とは、種々の染めや
金銀箔などを用いた料紙に
写経したもので、奈良時代の
遺例としては「二月堂焼経」
が有名である。書

装飾経とは、種々の染めや
金銀箔などを用いた料紙に
写経したもので、奈良時代の
遺例としては「二月堂焼経」
が有名である。書

装飾経とは、種々の染めや
金銀箔などを用いた料紙に
写経したもので、奈良時代の
遺例としては「二月堂焼経」
が有名である。書

第56回 現代女流書展

同時開催＝現代女流書新進作家展

会 期 令和7年2月27日(木)～3月3日(月)
午前10時30分～午後7時30分(入場は7時まで)
ただし、最終日は午後6時まで

会 場 日本橋高島屋S.C.本館 8階ホール
東京都中央区日本橋2-4-1 (地下鉄日本橋駅下車)

入場料 一般 800円 大学・高校生 600円 中学生以下無料

主 催 毎日新聞社／後 援 (一財)毎日書道会

【書道芸術院関係出品者】

運営委員 (か) 下谷洋子

女流書展 (漢) 半田藤扇

(か) 松村くに子

(近) 飯沼恵鳳・町山美扇・山崎掃雪

(大) 小林琴水・崎井恵風

(前) 大嶋珀曄・岡田琇韻・千葉紅雪・三森慧香

新進作家展 (か) 見越雪枝・(近) 菊池富美子

(大) 朝倉希代子・浜口瑞香・(前) 一條紅蕭

(777号～779号)	(774号～776号)	(771号～773号)	(768号～770号)	(765号～767号)	号	〈予告〉令和7年度 臨書課題
1月号～3月号	10月号～12月号	7月号～9月号	4月号～6月号	1月号～3月号		
蘇慈墓誌銘	李嶠詩	張遷碑	智永真草千字文	金文	古典鑑賞	
曼殊院本古今集	升色紙	針切	元永本古今集	寸松庵色紙	古筆鑑賞	

第12回声香社書道展 併設 喜寿展

●会期 令和7年3月14日(金)

～3月16日(日)

10:00～18:00

(最終日16時まで)

●会場 石巻マルホンマキアートテラス

〒986-0032

宮城県石巻市開成1-8

TEL 0225-98-5630

●主催 声香社 (代表) 米倉聲香

●後援 (公財)書道芸術院



第15回役TATAZ書展
第十五回藤井龍仙作品展

令和7年
2月21～3月5日
9:00～24:00
最終日は20時まで

第15回役TATAZ書展
第15回役TATAZ書展
第15回役TATAZ書展

22:00以降フジグランは開いていませんが出入りできます
駐車場は8:45開館24:30に閉館されます
入場無料です。希望はしてありません

フジグラン緑井5階エスカレーターホール ギャラリーPASSAGE

役TATAZ書展

東京都美術館に展示された
第78回書道芸術院展の
里帰り八街展を開催します。
皆様のご来場を心より
お待ちしております。



「吹雪く雪登」 尾村拓詩 桐岡隆紀 書



「八街書道会展」 三浦雅夫 書

書道芸術院展 八街書道会展

～会期～
令和7年3月6日(木)
～30日(日)

午前9時から午後4時30分
月曜日休館、30日は午後2時まで
入場無料

～会場～

八街市立図書館1階、2階
〒289-1115
八街市八街ほ800番地1

～ワークショップ～

日時：3月9日(日)・23日(日)
午前10時～午後2時
参加費無料・申し込み不要



手作りオリジナルカレンダー作り
※イメージ画像

主催：八街市教育委員会・八街書道会
後援：(公財)書道芸術院・白扇書道会
問い合わせ：八街市教育委員会教育部 社会教育課
☎043-443-1464 (土日祝日除く) 午前8時30分～午後5時15分

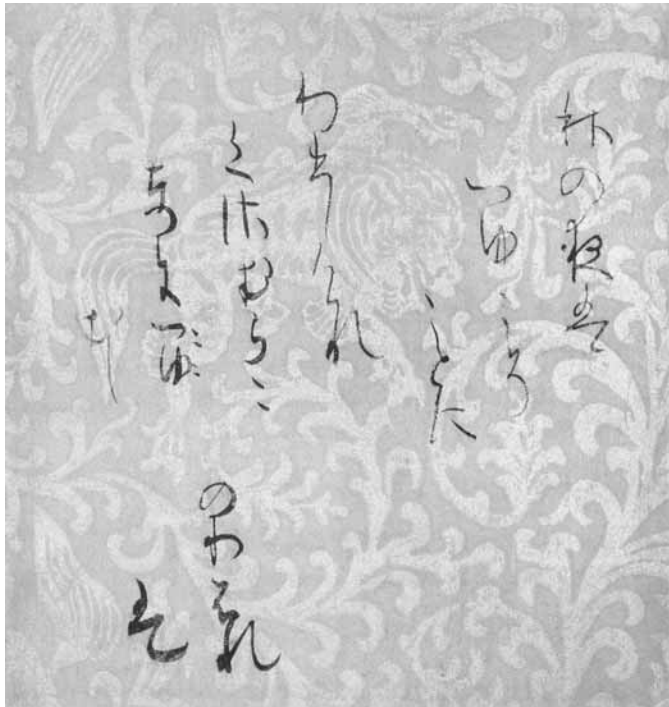


用入煇鼓予也即鼓用田鼓
 自濡洗る南至手太油一
 弄る陸二弄至于邊弄續
 洗濡陸平煇罽陸る也弄

右に示したのは参考例です。青銅器はサビや欠け、異物の付着等で、点画が不明瞭になることがあります。疑問点は字書でご確認願います。

古筆鑑賞 ②

寸松庵色紙 (伝 紀貫之筆) ③



(掲載図版・70%に縮小)

〈よみ〉
秋の夜は
つゆこそ
ことに
わびしけれ
くさむらごに
つゆむし
のわぶれば

古典鑑賞 ④

金文 ③ (虢季子白盤)



(掲載図版・70%に縮小)

不顯子白
戎工經纒
伐獵于洛
之陽

●篆刻

【3月15日締めきり】

〈出品規定〉

- ① 篆刻 課題による語句
② 創作 語句自由

○印面の大きさは2.3cm（八分角）以内とする。長方形、変形印は2.5cmを超えないこと。朱文、白文自由。
○印箋は市販のもの、半紙横1/2の大きさに切ったものも可。

○応募は①か②のどちらかとする。

2月号 篆刻課題

〈原印コピー〉



◎出品方法

用紙の右側に押印し、左側に印影の釈文を明記、並びに落款（氏号）を入れる。

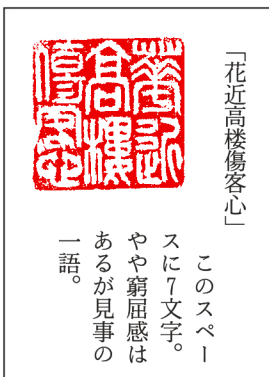
764号篆刻優秀作品

篆刻特選 庄司 櫻空



作品全体に風格すら感じ取れる細部の微妙な表現が魅力的。

創作特選 中島 義則



このスペースに7文字。やや窮屈感はあるが見事の一語。

◎篆刻部総評

今回は篆刻作品に充実した作品が多く見られました。細部にも配意し全般に好作品が出品されていました。今後の作品にも期待。

（大峰評）

選評 後藤 大峰

（篆刻） （創作）

特選	秀作	佳作	入選	特選	秀作	佳作	入選
蒼原◎庄司 櫻空	秀作（50音應）	大雲 鷺山 美梢 石心 成田 能喜 白琉 平塚 由香	大雲 小沢 華仙 大綱 片岡 豪峰	生大◎中島 義則	秀作（50音應）	唯一 逢沢 唯一 八街 新村 翠芳 やま 橋本 清麗	粹仙 藤井 龍仙 趙雲 吉田 恵弦
八街 佐藤 朱葉 香書 須賀澤 一起 生大 吉原 進	秀作（50音應）	（選外1名氏名略）	（選外1名氏名略）	（選外1名氏名略）	（選外1名氏名略）	（選外1名氏名略）	（選外1名氏名略）

今月の注目作

橋本 清麗



◎郵便物・清書・送金・一般事務等は

101-0031 東京都千代田区
東神田1-16-7
東神田プラザビル3階

公益財団法人 書道芸術院

電話（03）3862-1954
FAX（03）3862-1957

ご連絡等は
月曜日～金曜日 10時～16時の間に
お願いいたします。（土日・祝日は休み）

送料

1か月の購読部数	1部～9部までの1回の郵送料
1部	79円
2部	95円
3部	103円
4部	119円
5部	135円
6部	151円
7部	167円
8部	183円
9部	199円
10部以上	送料免除

令和七年 一月二十五日印刷
令和七年 二月 一日発行

定価 1部 七五〇円

編集兼 発行人 下谷 洋子

データ処理 株式会社 リンクス

印刷 小沢写真印刷株式会社

発行所 公益財団法人 書道芸術院

〒101-0031 東京都千代田区東神田1-16-7
電話（03）3862-1195 4
FAX（03）3862-1195 7
振替 001501411350588
http://www.linco.co.jp/shogi/